

終戦六十五周年を迎え

座間市支部 曾根 八千代（妻）

戦没者 曾根 敏夫

戦没地 中国・江西省

昭和二十年に入ると三月には東京大空襲、浅草本所深川の大都市は一瞬にして火の海と化し、犠牲者は数知れず内地の空襲も日毎に烈しくなり、八月六日広島、九日には長崎に恐ろしい原子爆弾が落とされ瞬く間に焼土と化した。大都市も真つ暗で人影もなく恐ろしい地に犠牲者が数知れず。最後の一兵まで戦う意気込みでしたが、天皇陛下は大御心を傷められ大決心賜り、これ以上国民を犠牲にできぬと八月十五日ラジオ報道で全国民に今日を以って敗戦の御心を伝えられました。無念の涙は溢れるばかりでどんな境遇になろうとも残されし者は働かなければ生きていかれません。敗戦国日本は崩れていくような日々でした。

暑い夏も過ぎ、十二月に入りますと彼所此所で復員を耳にするようになり、わが夫も来春あたりには復員してくれるのではと胸中に一縷の希望を抱きながら一生懸命働いて居りました所へ義父が慌ただしく迎えに来てすぐに家に帰るよう言った、何事だろうと不吉な予感が脳裏を駆け巡り家の中に入ると、仏壇に燈明が灯され線香まであげられているのです。義父は真剣な顔で「落

ち着いてしつかり聞きなさい。敏夫の戦死の公報が届いた」もう一度思い直し真実と知った時の驚き悲しみに胸も張り裂けんばかりで、二歳には程遠い、我が息子を抱きしめるとわっと泣き出してしまいました。これからどうなるのだろうと、長男の嫁の身ではこれ以上に頑張らねばと固く心に誓ったのです。息子が大きくなるまでは力の限り家族一丸となって働き、息子を立派に育てなければ夫に申し訳立たぬと己を励ましつつ九年過ぎました。

十一月の忙しい時、義父が脳溢血で突然倒れ一言もなく帰らぬ人となってしまったのです。悲惨な運命となり義父を何より頼みに過ごしてきた私達はどうなるのだろう、早速親族会議が開かれ、広い農地があるので弟が家を継ぎ私は勤めに出るよう決まったのです。この時ほど夫の存在がいかに大きかったか思い知らされ、張りつめていた氣力が音を立てて崩れていくようでした。息子は五年生になっておりましたが、父の顔も愛も知らぬ息子の心情如何ばかり憐れでなりませんでした。父の分まで息子の将来を大切にしなければ国に命を捧げた夫に顔向けできぬと固く心に誓ったのです。

叔父の知り合いで国立病院にお勤めの方をお願いして臨時でもよかったらと、当てもない勤めに行くのだから致し方ありません。昭和三十年三月より働くことになりました。

早速、棟まで分けられ母子の貧しい生活が始まったのです。田舎のこと故、乗り物も不便だし、勤めとなると責任はあるし、雨の日嵐の日、思わぬ災難に出会った事も幾度か。息子も年毎に頼もしくなり、中学も友人に恵まれ卒業し高校も特別育英資金をお借りして健康で無事卒業。心配していた大学も何とか入学、学習塾も開きアルバイトをしながら学校に通い昭和四十年卒業して

ほっとしました。

ささやかな家も建ててくれ就職も公務員として県庁で働き始めました。二人で働き軌道に乗ってきました。四十七年には身内の仲人で世帯を持ち賑やかな家庭となりました。翌年には初孫も生まれ人並みの家庭を楽しませて頂いて居ります。

昭和五十三年三月で二十余年の勤めを辞め同年夫の三十三回忌も済ませ、平成五年秋五十回忌も無事近親者に供養して頂きほっとしました。息子も人並みになって夫もさぞ喜んでくれると思います。平成十四年に教育長を命ぜられ長い年月苦勞に耐えてきての慶びに私が短歌を詠みました。

父知らず 辛苦に耐えて 幾年瀬の 神に守られ 今日の慶び

終戦六十五年を迎えても私達日本人は忘れる事はありません。こんな恐ろしい戦争を二度と起こさないで下さい。これからの若者に二度と味あわせたくありません。核兵器のない明るい平和な世界が永久に続きますよう祈るのみでございます。